

■ 研究所だより

須賀 貴子

今、私の手元には2012年9月号の『協同の発見』があります。研究所だよりの終わりに「ごあいさつ」ということで、事務局に入局した私の挨拶文を書かせていただきました。あれから10ヶ月後。今号でまた会員の皆さんへの挨拶文を書くことになるとは…。今年7月1日付で協同総研から労協センター事業団北関東事業本部 森の102工房(所沢)に異動することになりました。

昨年9月、これまでの仕事内容とは大きく異なるため期待と不安いっぱい現場から異動してきたことを覚えています。そんななか最も印象に残っているのは、2013年5月号の『協同の発見』での、初めての企画担当でした。障害者就労と協同労働での制度的な矛盾を感じていたこともあり、特集「困難を越えて－障害当事者と拓く協同労働」を組みました。障害福祉の関係者の方などから追加注文をいただき、思っていたより反響があり、とても嬉しかったです。一方で、センター事業団の内外関係なく、他にも隠れている豊かな実践を取り上げられなかったことが反省としてあります。

昨年の労協連・センター事業団の総会・総代会において、「最強の事業所・現場づくりを進めるための最強の本部づくり」という方針が打ち出されました。私自身、協同総研のある本部に異動してから、このことを柱に考えてきました。「最強の協同総研」とは何なのか、現場・事業所から何を求められているのか、どうすれば協同労働

運動の発展に寄与できるのか。答えははっきりと分かりませんが、センター事業団の事業の展開と課題に真正面から向き合い、発信すること、そして外部の組織の豊かな実践を学ぶ機会をつくることだと思っています。実践、研究の双方から協同労働をより深め、運動を支えていくことが必要だと思っています。その一つでもある『協同の発見』の充実により力を入れるべきだったと反省をしています。

また、最も心残りなことは、会員の皆さんとの交流を思うように図ることができなかったことです。研究会の案内等はメーリングリストで送信させていただいておりましたが、直接お会いしてお話を伺えなかったことをとても残念に思っています。

協同総研から離れることはとても名残惜しいですが、気持ちを新たにして森の102工房でも精一杯取り組んでいきます。森の102工房については、研究所だよりでも何度か書かせていただきました。昨年は、厚労省の中間的就労のモデル事業にも選ばれ、研究機関や研究者の方からも注目をさせていただきました。しかし、立ち上げから丸1年が経過した現在も経営は非常に厳しく、全国の仲間から支えられている状況にあります。現場では豊かな取り組みが繰り広げられていますが、事業所の自立的な運営のためには、組合員の本当の意味での自立・自律は欠かせません。私自身、現場の

一組合員として、そしてリーダーとして組合員と共に変化・成長をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、会員の皆さん、編集委員の先生方、理事の皆さん、5月号作成にあたってご協力をいただいた執筆者の皆さんなどたくさんの方々に支えていただ

き、心よりお礼申し上げます。そして、事務局の皆さん、短い間でしたが本当にありがとうございました。組合員でもあり、会員でもありますので、今後も一緒に協同労働運動の発展に取り組んでいきたいと思えます。今後ともどうぞよろしく願います。

ごあいさつ

上平 泰博(協同総研 専務理事補佐)写真左、相良 孝雄(協同総研 事務局長)写真右



新参者のつぶやき1906

「協同総合研究所」との距離感が最もあったであろう上平泰博(専務理事補佐)と相良孝雄(事務局長)が、どうしたことか新人として着任することになった。

上平にとっては労協連、センター事業団の会合で出席することもある日本教育会館。ここは日教組本部とともに、かつてはシンクタンクとしての「国民教育研究所」(世界・ドイツ中世史の上原専禄初代所長)があった。わたしが学生のころ70年代はじめに訪問したときは沖縄と国際平和を探究していた第二代所長森田俊男であったが、そのときはじめて図書館を併設した「研究所」の所員に出会った。

そして私の直接の恩師たる海老原治義が91年に「国民総合文化研究所」という名称で再建する。私はすでに還暦を過ぎ、物故された諸先生たちを回顧しながら、今となってまさか自分が「研究所」などというところで働くとは思ってもよらず、あのかのときの「研究所」風景を感慨深く想起させられている。

ところで、まだ若い相良と老練とはいえない私に共通点するところは、これまで三多摩事業本部に所属する組合員ということにくわえて、3年ほどまえ偶発的に韓国ハジャセンター、ヨンイン市の生涯学習センター、ソウルの児童館学童保育施設の見学をしたことくらいである。上平にとってこれまでの主たる業務は子育ての現場であり、相良にとっては事業本部の事務局長だから、あらゆる世代を対象にした現場の仕事おこしだ。したがって韓国視察のときは現場感覚の延長に過ぎず、研究対象とか研究視点というほど大袈裟なものではなかった。ただし相良は、すでにイタリアやスベ

インの協同労働組合の現場を訪れ精通していたので、断定できないかもしれない。

とはいえ協同総研に異動する以上、あまり意識することもなかった「研究所」の心構えについて少しは意識せざるを得ない。われらの経歴からして労働者協同組合の現場という視点を抜くことは全く不可能だから、このことを大前提とするからこそ、なぜ労働と遊びが問題視されてこなかったのだろうか。稚拙にも大上段に構えたりしたくなる。われの意識は所詮この程度なのである。遊びが先か労働が先かなどというユーモラスな話だ。20万年前のホモサピエンス時代なら今日と明日を必死に生きるために食べ物探しの労働と少々の休息だったろう。しかしそれ以前のサルやゴリラの時代ならば遊びではなかったのかとも。ゴリラやチンパンジーには労働観はないだろうに。にんげん社会に文明が現れたころ、少数者だけかもしれないがやっときさ労働の中に遊び心が、遊びの中に労働の意思が渾然一体となっていたのではないかと滑稽なくらい類推したりする。近代社会は末期症状で労働をなるべく忌避して遊びの世界へと逃避没入するといった両者分立の関係が著しくなっている。金持ちは労働を必要とせず遊びだけの人生で終わるのかもしれない。庶民は過酷な労働のあとにのみ、少し元気になるための遊びの時間がセットされたりする。

アートなあそび人が亡くなっていく人間疎外の労働にイギリスの美術批評家ラスキンは、いちれんの著作において当時勃興し

つつあった非人間的営為のイギリス資本主義の産業革命を徹底的に批判しつづけ、そのアートのなさヒューマニズムのない醜さと合理主義、機能主義の表出を酷評し、もう中世の時代へ回帰しようとして提唱する。39巻の全集を刊行する天才ラスキンがなぜそう叫ぶのかを私流解釈すれば、人類誕生から20万年生存を確実に保障してきた、にんげん本能ともいべきヒト同士の助けあい、分かちあい、支えあい、学びあいといった生者の必須条件となる協同志向型にんげん遺伝子そのものまでもが、近代国家社会に入ってから抹殺されようとしている危機感からではないか。

オランダの中世史研究の哲学者であるホイジンガもまた「ホモ・ルーデンス」を刊行し、70年代ころから日本でも盛んに読まれるようになった。そこでは日本人による簡易解説本にはカイヨワの著作の方が好まれるようで、「遊びこそが大事と遊びの分析」論ばかりが一色となった。とはいえ、まちづくりコミュニティーデザイナーのラスキンのように情熱家である延藤安弘などは、遊びを四つの要素に分類したカイヨワ的遊び信望者では飽き足らず、遊びとはAutonomyであり、Driftingであり、Expressionなのだと言説をくわえていく。それでも私は中世研究史家ホイジンガの労働や文化とあそびの関係の方が絶妙な思想であると考えている。だから協同労働を志す人たちには、「ホモ・ルーデンス」を漫画的必読書のひとつにしてほしいとおもう。

それともうひとつ。協同組合の原形を

「労働者」という群れが存在するようになった資本主義社会成立以降に位置付けるのはどうなんだろうかと、奇想天外な私には釈然としない。つまりイギリスロジデールの起源からはじめてしまう協同組合なんてというあんばいだ。経済学者の池上惇は柔らかい頭脳の持ち主だから、資本家と労働者という関係を別次元に置き、江戸時代の二宮尊徳の五常講、大原幽学の先祖株組合などから説明したりする。

私も池上先生にあやかりたいとおもい、この春に沖縄本島最北端のオク集落について調べてみた。日本社会党が成立し、幸徳秋水がアメリカから帰国したのは1906年のことだった。この年は沖縄最北端の奥において共同売店が発足している。当時の店則の第三条には「字奥在籍ノ人民ハ本店ニ対スル権利義務ヲ有ス」と記されている。奥地域の労働住民共同出資による共同売店は部落の産業と経済、教育・文化・福利厚生、

環境衛生、納税、貸付、運送業等々すべての事業を成している。たんなる「売店」ではなかった。これは今日でいうところの労働者協同組合の理想とする未来の姿ではないか。日本の協同組合の最初の法的根拠となった産業組合法(1906年の改正)によって、信用、販売、購買、利用の兼営が可能とされ全国各地へと拡がった。しかし、日本国がこの法律を盾に七変化政策で国家誘導させようと、シマやムラのある地域共同体下の共同売店方式は生き残れるというのが沖縄の歴史だった。

伊波普猷は同じく1906年の琉球新報において「日琉同祖論」を掲載した。ここに研究理論上の琉球国独立論は完全に潰えたが、その後も沖縄ヤンバルの最北端に共同売店が生き残っている。世界遺産ヤンバルの森の大半が今も、米軍射撃訓練場域でもあるのだが。(上平記)